

〈子ども〉をいかに捉えるか —古田足日と80年代子ども論—

How to Comprehend “Children”: Taruhi Furuta and his Studies of Children on 1980’s

鬼頭 七美*

2020年2月、児童文学評論および児童文学作品で著名な古田足日の蔵書約33,000冊が白梅学園大学に寄贈された。これを受け、古田足日の思想と文学を探究するべく、科研費をベースとしたプロジェクトが立ち上げられた。資料を活用した研究の開始に先だて、まず最初に行われたのは、蔵書移送に当たって、古田家における書棚の配置や、書棚の棚のなかでの本の並びなどを写真に撮影し、棚の一つ一つに枝番号を付すなどして、どの本がどの棚にあるか、どのような本を身近に置いていたかなどといった情報を残し、蔵書の全容を本の配置情報とともに確認できるようにすることだった。

移送作業が行われた後は早速、蔵書に関する調査が開始された。まず最初に行われたのが、古田足日のデスク周りに配置された本に関する情報のリストアップ作業である。まだ精査途中であるものの、ここまでの印象では、子ども論、保育論、教育論、心理学、文化人類学、民話、民俗学、古代史、郷土史料、思想・哲学、戦争関係、平和論等、実に多岐にわたる領域に古田の関心が向けられていたことが分かる。古田の著作を知っているものであれば、当然のラインナップと言えそうである。だが、デスク周りの書棚と背中合わせで置かれた書棚(デスク周りの書棚の裏側にある書棚)の一角には、こうした研究書や資料とは異なる現代文学が並べられている。子ども関係の図書ではない小説の類は、すぐに手の届くデスク周りにはあまり置かれていないことなどは、今後、古田の

執筆活動の実際と付き合わせて再考する必要があるだろう。

ところで、古田足日と言えば、1953年の「少年文学の旗の下に！」(いわゆる「少年文学宣言」)や1959年の「さよなら未明」などの評論文により出発した評論家として知られる。こうした経歴からすれば、1950年代以降、2010年代までの書物が満遍なく蔵されていてもよさそうであるが、デスク周りの書棚に見出される書物の多くは70年代、80年代、90年代あたりのものであり、とりわけ80年代、90年代のものが多いようである。まだ作業途中であるため正確に数値化する情報ではないが、以下、本稿では、これらの蔵書と同時期に刊行された古田の著作物との関係を問い返すことを試みたい。注目するのは、蔵書に含まれる80年代における子ども論との対応についてである。

1. 転換点としての1980年代

古田足日は、評論家として華々しくデビューしたのち、創作にも手を広げるようになったと思われるが、伊藤英治編の「年譜」*¹によれば、1953年の「少年文学宣言」よりも前の1950年、「少女クラブ」(8月号)に創作が掲載され、はじめて原稿料を得ている。また、1951年、早大童話会に入ってからすぐの頃、機関誌「童苑」に創作をいくつか発表しており、この「童苑」には評論と創作を平行して発表していく様が窺える。

しかし、古田と言えば、その評論のインパクトが強かったのも事実であり、神宮輝夫は学生時代の童話会での古田について、次のように回想して

*子ども学部 子ども学科

いる*2。すなわち、「まだ修行中で自作が習作でしかないことを知っていたわたしたち」の作品を「分析して、それぞれの長所をあげ、それぞれの作品から伸ばすべき傾向を整理し」てみせた古田には、「多くの作品の流れの中で見る視点」があり、「包括的に状況をとらえて先を読む目が」「かなりはやくから見られた」という。

その後の古田は、現代児童文学の方向性を規定したことで記憶される「さよなら未明」を含む『現代児童文学論』（くろしお出版、1959・9）を出版し、翌年、この本により児童文学者協会児童文学新人賞を受賞するが、一方で、その後、創作である『宿題ひきうけ株式会社』（絵・久米宏一、理論社、1966・2）を刊行すると、その翌年に、この本により日本児童文学者協会賞を受賞、名実ともに、評論・創作の両方で評価される存在となった。

この頃の古田は「子どもは群れて育つ、子どもは遊ぶ」*3という考えを強固に持っており、この考えのうち特に「子どもは群れて育つ」の方については、『宿題ひきうけ株式会社』や『モグラ原っぱのなかまたち』（絵・田畑精一、あかね書房、1968・12）、『ダンブえんちょうやっつけた』（絵・田畑精一、童心社、1978・4）などに顕著に見られるように、集団で生き生きと遊ぶ子どもたちの姿を活写することで表現してきたと言える。

しかし、80年代に入る頃、転機が訪れる。「略年譜」で「これまでの講演内容は主に児童文学であったが、このころから子どもと文化に関する内容が多くなる」*4と記述されているように、古田は子どもの文化についての研究に関心を向け始める。この転機については、古田自身が述べているように*5、1976年に山口女子大学児童文化学科の教員として赴任し、「児童文化」と「児童文学」の授業を担当したことが大きく作用している。このとき、「児童文学」のみならず、「児童文化」の授業を担当するに当たり、古田ははじめて「児童文化」というものと向き合うことになったという。そして、このとき古田は、「児童文化」について

の総合的というか、原理的というか、そうした研究書はないに等しく、「あるのは「児童文化」というタイトルのついた概説書でしかない」ことに「不満が残るのを感じた」のだという。

山口女子大学での教員としての履歴は1年ほどで終わり、1980年には単身赴任をやめて帰京することとなったが、その後、1981年5月には「子どもの成長発達と文化の関係と自分の児童文学のあり方を深めるため」に、「古田足日児童文学塾」（通称、古田塾）を開くとともに、1982年には子どもの文化研究所内に「子どもと文化研究会」を発足させている*6。この間、1981年には「児童文学批評の会」も発足させ機関誌「季刊児童文学批評」を創刊したり、1982年の「核戦争の危機を訴える文学者の声明」に参加し、児童文学者の署名を集めるなど、精力的に活動していることが分かる。

こうして見ていくと、1980年前後を境に、正確には山口女子大学での「児童文化」の授業を担当する前後で、児童文学にのみ向けられていた関心が子どもと文化へとその幅を拡げていった軌跡が窺われよう。

この変化は著作物にも表れている。古田の単行本化された評論集を列举してみると、次のようになる。

- (1) 『現代児童文学論』（くろしお出版、1959・9）
- (2) 『児童文学の思想』（牧書店、1965・1）
- (3) 『児童文学の旗』（理論社、1970・6）
（「児童文化とは何か」、「現代教育科学」1979年に連載）
- (4) 『現代日本児童文学への視点』（理論社、1981・4）
（「子どもと文化」、「講座現代教育学の理論2」青木書店、1982・4所収）
- (5) 『子どもを見る目を問い直す 古田足日講演の記録』（童心社、1987・10）
- (6) 『児童文化とは何か』（久山社、1996・4）
→初出1979年の単行本化
- (7) 『子どもと文化』（久山社、1997・2）→初

出1982年の単行本化

このうち、(4)の『現代日本児童文学への視点』は70年代の著作を集めたものであるので、これを括弧にくくってみると、1979年以降、児童文化ないしは子どもの文化という「文化」論へとシフトしていくさまが見て取れる。

2. 「子ども」観の更新

これまで述べてきたように、児童文学から子どもの文化へという転換の要因としては山口女子大学への赴任が挙げられるが、実はこれだけが理由ではない。ちょうどこの頃、「子どもの自殺や非行の報道が目立ってきた」ことや「中学生の殺傷事件」などが報道され、「子どもの心の荒廃が」「いっそう進んだ」ことを受けて「児童文化」はどう向き合うことが出来るか^{*7}という問題意識もあった。似たようなこととして、早大童話会にいた頃には「子どもというものは自殺しないんだ」という共通認識を仲間と持っていたのに、「二十数年たって、今、子どもがぞくぞく自殺する世の中になっている」のは「時代のちがいのなか。それとも、子どもというものもそうであることをほくちちが見抜けなかったのか、どうか」というように、「文化の力の大きさ」を考えざるを得ない^{*8}という認識に至ったことも挙げられる。

要するに、60年代から70年代にかけて古田が絵本を創作するなかで描いてきた〈群れて遊ぶ子どもたちの姿〉は、「子どもは自殺しない」という向日性に根ざした子ども観に基づくものであったことが指摘できる。そして、これに対して80年代に入ると、このような子ども観では子どもを捉えきれなくなっていることが実感され、古田は「古田塾」や研究会を開催し、そこに集まる人々との議論を通して、新たに浮上してきた〈重苦しい子どもたち〉の姿を捉え返そうと努めたことが分かるのである。

こうした社会情勢を背景とした「子ども」論を展開したのは、古田に限らない。教育学者や心理

学者はもちろんのこと、「従来は「子ども」と無縁に見えた哲学者や文化学者、あるいは評論家たちのなかに、「子ども」を視野に入れて論を立てる人々が目立ち始め」^{*9}、子ども論が大いに活発化したのが、80年代であった。それらの著作は、例えば本田和子『異文化としての子ども』（紀伊國屋書店、1982・6）、山口昌男ほか『挑発する子どもたち』（駸々堂、1984・1）など、いずれも子どもを純真無垢で保護し教育する対象と眼差す大人から見れば、違和感をかき立てるタイトルであったと言える。内容的にも、子どもは大人にとっての〈他者〉であることを論じており、やはり耳目を驚かすに十分なものであったと思われる。

これらの子ども論の端緒となったのは、周知のようにフィリップ・アリエス『〈子供〉の誕生—アンシャン・レジーム期の子供と家族生活』（みすず書房、1980・12）の翻訳が刊行されたことであるが^{*10}、ほぼ同時期に柄谷行人の「児童の発見」（『日本近代文学の起源』講談社、1980・8所収）が発表されていることも見逃せない。いずれも、子どもの見え方が時代によって変化するものであるということを指摘し、大きな話題となった^{*11}著作である。本田和子はアリエスの著作のインパクトをのちに「アリエス・ショック」^{*12}と表現している。これらの子ども論を受けて、前田愛は80年代当時にまさしく「子どもたちの変容」^{*13}と表現していた。同じ頃、ニール・ポストマンの『子どもはもういない—教育と文化への警告^{*14}』（新樹社、1985・5）が翻訳され、このタイトルも人々をざわつかせるものであることが今見ても窺われる。

先にも言及した前田の「子どもたちの変容 近代文学史のなかで」では、明治期・大正期の子どもを描いた文学作品をいくつか取り上げ論じているが、このなかで文学に描かれた子ども像を三つに分類している。すなわち、「^レ何かになる、存在、大人になる過程として捉えられた子ども像」「^レ無垢な子ども、という概念、子どもの世界を大人に

としてのユートピアとして捉え、そこへ大人が帰って行く―帰る、対象としての子ども像「子どもは子どもである」という捉え方、子どもの中に、大人にはないさまざまな可能性、あるいは生成というものを発見しようとする第三の立場」の三つである。この「なる・帰る・である」という三つの捉え方のうち、「なる」とは子どもを教育される存在として見ることを指しており、「帰る」とは大正期に雑誌「赤い鳥」を中心として起こった童心主義が当てはまると言える。童心主義は子どもに大人の理想を当てはめたものとして今日、批判的に捉えられているものであることはすでに言われて久しいところであろう。一方、「である」については、古田が60年代、70年代に創作した絵本のなかで描いてきた群れて遊ぶ子どもたちの捉え方が当てはまると言えるのではないだろうか。

前田は、この三つの捉え方のそれぞれに当てはまる文学作品を挙げているのだが、谷崎潤一郎の「小さな王国」（「中外」1918・8）は「無垢でもあり、邪悪であり、残酷であるという、そういう子どもの両義性というものを正面から見据え」た作品であり、「なる・帰る・である」の三要素を兼ね備えているという^{*15}。一方、専ら「である」の観点から子どもの姿を捉えてきた古田は、80年代の子ども論が席卷するなかで自身の仕事を振り返り、「自分に関心のあるものには目がひきつけられる」という状態でなされた仕事においては、「こちらに見る態度、見る仮説がなければ「見えない」こと、「見えない」ものも多い」と述べ、自分が見たいと感じた子どもの姿しか見てこなかったことを反省している^{*16}。

このように「子どもとはこういうもの」という「枠によって子どもを見てしまう」我々の視界をまずは疑ってみることを古田は提案している。この提案は、「小さな王国」のように三要素全てを満たそうとする方向性ではなく、三要素自体を懐疑し、検証しようとする態度だということが出来るだろう。

3. 理想としての子ども

古田は80年代において同時代の子ども論をいかに受け止めたのか。その具体的な様相については、先にも引用した『子どもを見る目を問い直す』の「5 子どもを見る目を問い直そう」に端的に示されている^{*17}。ここで古田は、マリー・ウインの『子ども時代を失った子どもたち―何が起きているのか^{*18}』（サイマル出版、1984・8）を主な参照枠としながら、80年代子ども論に対する自らの考えを述べている。それは、以下のようなものである。

古田は、ウインが「子ども時代は親が子どもを守る『保護の時代、ではなくなり、大人の社会へ入るそなえをする『準備の時代、となった』現代において、「どういうわけか、今は、かつて子どもの世界と大人の世界を分けていた明確な境界線がぼやけてしまった」と述べていることにまずは注目する。そして、ウインの本は「その「どういうわけか」を彼女なりに追及し、ふたたび境界線をつくりだし、保護された子ども時代を回復しよう、と提案している本」であると概括した上で、古田は「彼女の考えには、うなずけないところがいっぱいあります」というように率直な疑念をぶつけつつも、ウインの提案を自分なりに咀嚼しようとする。最終的に、「子ども時代は回復しなければならぬ、しかし、その内容はかつての子ども時代の回復ではない。新しい子ども時代の創造だろう」というようにビジョンを示すのである。

また、ここで古田は、アリエスの『〈子ども〉の誕生』についても、同書がフランスの中世の子どもについて非常に綿密な調査をしたものであることについては意義を認めながらも、これが日本の中世、すなわち室町時代にも適用できるかどうかについては留保を付けている。さらに、ポストマンの『子どもはもういない』についても、「マリー・ウインの本と姉妹編ではないかと思われるほど、共通のところがああります。もっともウインは子ども時代の回復を提案し、ポストマンは「消滅」を予言しています」と言及しながら、古田は

「子ども時代」の「回復」を説くウインの提案の方を問題として引き受けていくのである。

さらに古田は、概念としての〈子ども〉や、存在としての〈子ども〉をどう捉えるかということをめぐる同時代の議論に向き合うと同時に、教育史のなかで捉えられてきた子ども像についても言及していく。そこでは、ロックやルソーにおける子どもの捉え方を、ポストマンおよび為本六花治、坂元忠芳らの著作が援用されることで、「ロックやルソーによって「発見」された子どもの内容と、それによってつくりだされた子ども時代とが、社会の制度としてあらわれたのが学校だった」というように概括されることになる。そして、「義務教育の制度が成立すると、その学校に行っている期間と子ども時代は、ほとんど同一視されるようになった」ことを踏まえ、「子ども時代というもの考える際、学校をぬきにして考えることはできません」と述べるのである。

こうした考察の跡をたどることで、80年代子ども論のインパクトを児童文学に携わるものとしてどう引き受けるか、という古田の基本姿勢を確認することができるだろう。

この講演記録のなかで古田は、その当時の子どもたちの社会的変化を指して「不安」と「早熟」の二語で捉えようとしている。さまざまな具体例を出しながら、観念的で早熟だった1人の自殺した少年の葛藤や不安や思索をもとに「子どものうちにある「思索する」という可能性」に期待を抱いている。ここには、軍国少年だった少年時代の自分の「思索」のなさへの反省も込められており、「平和への意志」とそのために「努力をする大人になるための子ども像」を考えていきたいという。

子ども像に対する古田の理想的なイメージと期待は、確固たる信念として希求されたわけではなく、この時点でのとりあえずの結論として提示されたものであることは、この講演のなかで再三にわたって自分にはまだ分からないことがたくさんあると言及されていることから窺える。しかし、このように示された暫定的な結論には危うさもつ

きまとう、という点について、やはり指摘しておかなければなるまい。

かつての古田が「子どもは群れて育つ、子どもは遊ぶ」という向日的な子ども像を疑うことなく信奉し、それに基づいた絵本をいくつも創作したことは先にも触れたが、このときのポジティブな子ども観と、80年代に自らが子どもに向ける目を問い直し、かつての自らの子ども観を反省した上で、子どもになにがしかの期待をし、理想的に子どもをイメージする子ども観とは、非常に近接しているように見えるからである。

コロナ禍という未曾有の時代状況に突入した2021年4月現在、子どもの自殺が過去最多を記録したこと^{*19}や、いじめが小学校低学年へと低年齢化したこと^{*20}が報道されているのを見ても、〈子ども〉という存在をどう捉えるかということをめぐる、われわれは未だ明確な答えのない模索のただ中にある。古田が希望的に述べた子ども像も、今日の社会状況において有効と言えるかどうか未知数であると言わざるを得ない。

4. 蔵書と創作活動の相関

以上、見てきたように、古田は80年代子ども論の喧しいさなか、とりあえずの子ども像を提出した。最後に確認しておきたいのは、こうした子ども像を提示するために、古田がどのような模索を行ったのか、ということである。

古田が絵本を創作するときの態度として、現場の子どもたちの姿を徹底的に取材し、研究したことは有名である。

例えば、『おいしいのぼうけん』（童心社、1974・11）は古田と画家の田畑精一が童心社の編集担当だった酒井京子とともに、実際に保育園を数カ所回って取材して作られたという^{*21}。子どもがおいしいの上下に入れられるエピソードや、子どもたちが怖がる人形劇「ねずみばあさん」の話など、実際の子どもたちの様子をヒントにして、絵本のなかに取り入れられていった。絵本づくりも文章は古田、絵は田畑というように截然と分担

が分かれていたわけではなく、二人で意見を出し合ったり、出来上がる過程で絵の図案に対して文章の方に手を入れたりするなど共作とも言える作り方であったため、この絵本の署名は「ふるたたるひ・さく、たばたせいいち・さく」というように、両名ともに「さく」が付されている。

ほかにも、『ダンプえんちょうやつけた』（童心社、1978・4）も宮城県の「わらしこ保育園」を取材し、お母さんの花柄のパンツをはいている男の子「ガラパン」のモデルとなる子や、リヤカーで子どもたちを遊ばせるダンプえんちょうのモデルとなる「わらしこ保育園」の園長・高田敏幸などにヒントを得、そのままの形で絵本のなかで登場させている*22。

翻って、古田塾や子どもと文化研究会において、古田はどのような勉強会を行っていたのだろうか。

国松俊秀*23によれば、「編集者、幼稚園の保母、人形劇団員、読書運動に携わる主婦、公務員、作家…と、その職業はさまざまであり、「八〇年代」という「現代の子どもをとらえるためにどうしたらよいか。子どもの文化だけから見のではなく、日本人の生活様式の変化といった広い所から見ていこう」と、みなで調べたり、いろいろな本を読んでレポートを書いたり、話し合ったりしたという。メンバーには「小学校の教師、保母、学童クラブの指導員などもい」たため、「現場での報告をもとに勉強もし」て、「メンバーがそれぞれ考えていることをどんどん発表し、意見を戦わせ」「みなで討論をしながら問題のありかを探っていく」という「自由な雰囲気」があったようである。

このように、絵本作りににおいても、物事を探究し思索を重ねていく際にも、古田は、現場の声を大事にすると同時に、複数の人間で集まって討議をするというように、集団のパワーに常に取り巻かれていることに気づかされる。「子どもは群れて遊ぶ」というテーゼは、古田その人の性格でもあったのではないだろうか。

最後に、本稿でここまで述べてきたことを、古

田の蔵書リストと突き合わせてみたい。いまだ作業途中ではあるものの、これまで確認できる範囲で言えば、古田は前節で言及したような80年代子ども論の著作も当然所蔵しており、目に付く範囲では、先に見た講演記録のなかで年代的に言及が見当たらないのは当然とはいえ、例えば芹沢俊介『現代〈子ども〉暴力論』（大和書房、1989・9）や小浜逸郎『方法としての子ども』（大和書房、1987・7）などに付箋を貼って読書した形跡がある。本田和子『子どもの領分』（1983・9）には付箋のほか、献呈の辞もあった。山口昌男ほか『挑発する子どもたち』にも付箋が付されていた。エリクソンやエヴァンス、オルポートといった精神分析や心理学の本にも付箋が貼られており、熱心に勉強したさまが窺えよう。

このほか、非常に目立つのは子どもの遊びについての本の多さである。かこさとし・永田栄一『鬼遊び—日本の子どもの遊び』（青木書店、1986・12）や仙田満『こどもの遊び環境』（筑摩書房、1984・9）、河崎道夫編著『子どもの遊びと発達』（ひとなる書房、1983・4）などのほか、こまや竹とんぼ、草笛、童歌など日本の伝統的な昔遊びに関する本など、ここに紹介しきれないほど精力的に収集している。これらはいずれも、付箋を貼ったり、書評を表紙見返しに貼ったり、時には献呈された著作に目を通して、網羅的に研究した痕跡を見出せる。

蔵書から見えてくることも、先に見た集団のパワーに相通じるものが感じられる。一つ一つの本が〈集団〉となって古田をエンパワーしていたと見ることも出来るだろう。それと同時に、付箋の多さは、勉強会・研究会で自分が言及しようと思った箇所だったり、会のメンバーが言及していた箇所をあとから読んで付箋を貼ったりした可能性もあり、勉強会・研究会の場が古田をいかにエンパワーし支えていたかもうかがい知ることができるのである。

しかしながら、さすがに絵本の作風は変化を見せていく。例えば『犬散歩めんきょしょう』（借

成社、1988・12)では、ゲームに夢中になる子どもが描かれる。インコに「シユクダイ、ヤッタ?」「ハヤク、ハヤク。ワカッタ?」と言われ、手元が狂い、ゲームが上手く進められずにインコに向かってどなる少年の姿は、当時に限らず、今日にも通じるリアルな子ども像を映しているだろう。ほかにも父親が単身赴任で学校ではクラスメートと上手くコミュニケーションの取れない引っ込み思案の少女が描かれ、学校で起こっているいじめ問題に切り込もうとしたことが見て取れる。「ここに出てくる子どもたちは、モグラ原っぱで遊んでいた子どもたちにはなかった、悩みを持った子どもとして登場*24)」していることが窺えよう。

また『学校へ行く道はまよい道』(草土文化、1991・7)は、体罰を行う教師や、不登校、いじめなど、子どもを取り巻くさまざまな問題を盛り込んでおり、「子どもたちのうめき声ばかり*25)」が聞こえてくるという印象を残す作品となっている。とはいえ、「なぜ?」「どうして?」という疑問を持ち、思考と調査を繰り返す子どもたちの姿は、1985年の講演記録に述べられていた「思索する」子どもの可能性をイメージ化し描出したと言えるのではないだろうか。

「集団で」かつ「思索する」という子ども像を自ら実践する形で追究していく古田足日の姿勢が今日子どもたちをも射程に収めたものであったかどうかということは、にわかには計りがたい。一方で、『おしいれのぼうけん』や『大きい1年生と小さな2年生』(偕成社、1970・3)などの創作の売り上げがミリオンセラーとなって今でも売れ続けているのはなぜかという問いも残されている。〈子ども〉はどのように変わったのか、また変わっていないのは何か。古田の探究は、我々に残された課題として引き受けていく必要が痛感される。

註

*1 伊藤英治編「古田足日年譜」(『全集古田足日子どもの本別巻』童心社、1993・11、p482)

*2 神宮輝夫「古田足日の批評」(『全集古田足日子どもの本第1巻』童心社、1993・11、p279-280)

*3 伊藤英治編「古田足日年譜」、前掲書、p490

*4 「古田足日略年譜」(ありがとう古田足日さんの会編集『古田足日さんからのバトン ホタルブクロ咲くころに』かもがわ出版、2015・8、p272)

*5 日本児童文化史研究会編『児童文化とは何か』(日本児童文化史叢書7)(久山社、1996・4、p12。1979年に「現代教育科学」に連載された同文章をまとめて新たに出版したもの)

*6 伊藤英治編「古田足日年譜」、前掲書、p499

*7 『児童文化とは何か』、前掲書、p12

*8 『子どもを見る目を問い直す 古田足日講演の記録』(童心社、1987・10)。引用は「1 生きる力をどう育てる」(初出は「風の子」15号、1977・10) p7-8より。

*9 本田和子『子ども100年のエポック 『児童の世紀』から『子どもの権利条約』まで』(フレーベル館、2000・4、p184)

*10 アリエスの著作の原著は1960年に刊行されている。

*11 柄谷の論考がいかに参照引用されているかについては、目黒強「『児童の発見』再考—イデオロギー装置論(アルチュセール)にむけて」(『児童文学研究』32号、1999・2)に詳細が報告されている。「日本児童文学言説史20選」(『ユリイカ』1997・9所収)に選出されていることや、日本児童文学学会編の研究叢書『研究=日本の児童文学』2~4(東京書籍、1995・8~1998・8)中の36本の論文のうち、5論文で言及されているという(p40)。

*12 本田和子、前掲書、p120

*13 前田愛「子どもたちの変容 近代文学史のなかで」(『国文学』1985・1)のタイトルによる。

*14 ポストマンの著作の原著は1982年に刊行されている。

- *15 前田愛、前掲論文（引用は、『前田愛著作集 第三巻 樋口一葉の世界』筑摩書房、1989・9、p382、p392による）
- *16 『子どもを見る目を問い直す 古田足日講演の記録』、前掲書。引用は「5 子どもを見る目を問い直そう」（1985年10月の講演をもとにしたもの）p239-240より。
- *17 『子どもを見る目を問い直す 古田足日講演の記録』、前掲書、p206-286
- *18 ウィンの著作の原著は1983年に刊行されている。
- *19 「児童生徒の自殺、最多の479人 昨年、休校明けに突出」（「朝日新聞デジタル」2021・2・15）によれば、この日、前年の2020年のコロナ感染拡大防止措置に伴う緊急事態宣言が発出された一年間の自殺した児童生徒の統計データが厚労省より発表され文科省が分析したものが発表された。記事はこの発表を報道するものである。
<https://www.asahi.com/articles/ASP2H6294P2HUTIL04D.html>（最終閲覧日2021・4・18）
- *20 「いじめのピークは小学校2年生 低学年ほど注意を」（「不登校新聞」552号、2021・4・15）
<https://futoko.publishers.fm/issue/5095/>（最終閲覧日2021・4・18）
- *21 「古田さんと田畑さんの絵本づくり 『おいしいのほうけん』 他ができるまで」（『全集古田足日子どもの本第5巻』童心社、1993・11、p462-464）
- *22 古田足日「あとがき」（『全集古田足日子どもの本第2巻』童心社、1993・11、p297）
- *23 国松俊秀「古田足日児童文学塾を開きます 討議の中で問題のありかを探す」（『全集古田足日子どもの本第2巻』前掲書、p346-349）
- *24 尾形禮子「作品舞台・サクラ市案内 サクラ市は、子どもたちにとって魅力的な場所だった」（『全集古田足日子どもの本第2巻』前掲書、p353）
- *25 山下明生「作品エッセイ・古田文学を読む 『森はどこへいった』（『全集古田足日子どもの本第3巻』（童心社、1993・11、p346）